

# 「せっかく」の持つ前提と 共起制限の関わりについて

—韓国語の副詞「모처럼, 일껏」との対照を兼ねて—

呉 珠 熙

## 1. はじめに

「せっかく」は、次のように単文には用いられず、主に複文の従属節に用いられるという共起制限がある<sup>1</sup>。

- (1) \*せっかく、雨が降った。
- (2) せっかくお弁当を作ったのに、雨が降った。

しかし、同じく複文の従属節に用いられる「もし」と「たとえ」は、次の例(3)(4)のようにそれぞれ順接の接続助詞「なら」と逆接の接続助詞「ても」と呼応していて、主節のモダリティ表現における制限はない。これに対して、「せっかく」の場合は、次の例(5)(6)のように、接続助詞と主節の両方のモダリティ表現において、一定の共起制限を見せている。すなわち、「なら」のような順接の接続助詞の場合は、主節の文末形式が意志、命令、勧誘などといった、待ち望み系のモダリティ表現に限られるし、「ても」のような逆接の接続助詞の場合は、主節の文末形式が推量、断定などといった判断系のモダリティ形式に限

---

1 渡辺(1980)、逓沼(1987)にも同様な指摘がある。しかしながら、「せっかく」は「せっかくのチャンスを利用しよう」のように単文に用いられることもある。「せっかくの」の文型と複文との関係については後述する。

られるという叙法上の制限がある<sup>2</sup>。

- |                            |  |
|----------------------------|--|
| (3) <u>もし</u> 犯人が捕まるのなら    | <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐに告訴した方がいい。</div> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐに告訴するだろう。</div> </div> </div> |
| (4) <u>たとえ</u> 犯人が捕まっても    | <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐには告訴しない方がいい。</div> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐには告訴しないだろう。</div> </div>   |
| (5) <u>せっかく</u> 犯人が捕まったのなら | <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐに告訴した方がいい。</div> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">??すぐに告訴するだろう。</div> </div>   |
| (6) <u>せっかく</u> 犯人が捕まっても   | <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">*すぐには告訴しない方がいい。</div> </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">{</div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;">すぐには告訴しないだろう。</div> </div>  |

本稿では、「せっかく」に見られるこのような共起制限を、「せっかく」の持つ「前提」との関わりを中心に考察する。

また、「せっかく」は、従来、英語、フランス語などの欧米の言語とよく比較され、その意味と用法を翻訳することが困難であることから、日本語の特有の表現として扱われてきた<sup>3</sup>。そこで、本稿では「せっかく」の各用法がそれ

- 
- 2 本稿では、仁田(1991)の分類に従い、文末のモダリティ形式を判断系と待ち望み系とに2大別する。判断系モダリティとは言表事態(命題)を確かなもの、または不確かなものとして判断するものであり、その下位タイプには「断定」「推量」などがある。そして、待ち望み系モダリティとはその事態実現を望ましく思うといった言表事態に対する捉え方であり、「意志」「命令」「必然」などの下位タイプがある。なお、この二分類は森山(1989)の「広義蓋然性認識ムード」と「広義策動ムード」の二分類にほぼ対応する。
- 3 板坂(1971)、西原(1987)、渡辺(1996)などを参照されたい。先行研究では、外国語に翻訳し難い日本語のモダリティ副詞として、「せっかく」の他に「さすがに、やはり、どうせ、なまじ」などを挙げている。

に対応する韓国語の副詞「모처럼, 일껏」を用いる場合、どの部分が翻訳可能で、どの部分が翻訳不可能であるか、という問題についても考察を試みたい。

## 2. 「せっかく」の文類型

説明の便宜上、最初に、複文における「せっかく」の文類型を規定することにする。

「せっかく」の叙法上の制限を基にして、複文における「せっかく」の文類型には次のような2つの類型があると考えられる<sup>4</sup>。

(一) せっかく A のに ～Bだ(だろう) (= (7))

(二) せっかく A (のだ) から Bしよう (= (8))

A：話者が価値があると認める事態

B：Aの価値を有効に活用する事態

～B：Aの価値が無効になる事態

(7) せっかく 桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。

A ～B

(8) せっかく 彼が帰ったのだから、あとは我々で思う存分楽しくやろうよ。

A B

なお、以下においても、このA、B、～Bを上述の定義で用いる<sup>5</sup>。

4 文類型(一)に該当する「せっかく」の用例には、「のに」以外に「ても、ながら、て、が、けど」のような逆接の接続助詞が見られた。また、文類型(二)の場合は、「(のだ)から」以外にも「のだし、ので、なら」のような順接の接続助詞がある。

5 Aは前件又は従属節、B(～B)は後件又は主節と呼ぶこともできる。

### 3. 「せっかく」に関する先行研究

#### 3. 1 見越しの評価（渡辺（1980）（2001））

渡辺（1980）は、「せっかく」の意味を次のようにまとめ、「せっかく」を「見越しの評価を表す副詞」と呼んでいる（p.37）。

Bが随伴的に成立するという期待と、そのBがまだ実現せず或いは遂に実現しなかったという現実とを前提として、Bを随伴的に成立させる可能性を持ち或いは持っていたはずの事態Aを、価値ありと認める話者の評価を表す。

そして、渡辺（2001）は、渡辺（1980）で示した「見越しの評価」という見解を引き継ぎ、次のように「せっかく」の意味を述べている（p.34）。

それ自身が話し手にとって価値のあるAが実現しているのに、それに伴って、実現しているAの価値を完全なものにすることを期待されるBが、まだ実現せず、あるいはついに実現せずじまいとなり、Aの価値が不完全に終わることへの、惜しみの気持。

なお、渡辺（2001）では、次のようにBが実現されてしまえば、「せっかく」は用いられないと述べている（pp.32-33）。

- (9) \*せっかく AだからBした
- (10) \*せっかく 雨が止んだのだから、急いで出発しました。
- (11) \*せっかく パリまで来たので、ルーブルを見て帰りました。

「せっかく」の先駆的な研究である渡辺（1980）は、「せっかく」が「ある

事態Aを価値ありと評価する」と同時に、「その価値を有効活用した事態Bが随伴的に成立するという期待」を前提としていると指摘したが、なぜ、必ずBが随伴的に成立すると期待されるか、についての説明はない。この問題については、次節で述べることにしよう。

### 3. 2 価値評価の原理 (蓮沼 (1987))

蓮沼 (1987) は、我々が価値評価に際し有する大前提として、次のような「価値判断の第一原理」「価値顕現義務の原理」があるとし、「せっかく」とは、このような価値判断に対する一般通念を前提として有し、その個別的な適用として現実における価値実現を願うといった話し手の態度を表すものであると述べている (p.207)。

#### 〔価値判断の第一原理〕

それ自体「価値有り」という評価しうる事態も、人間がその価値の發揮、有効利用を図らない限り、ゼロに等しいか、時にはマイナスに転落さえしてしまうのだ。

#### 〔価値顕現義務の原理〕

潜在価値は顕現させなければならない。

つまり、2節で提示した、複文における「せっかく」の文型中、「せっかく桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった(=7))」には〔価値判断の第一原理〕が、そして、「せっかく彼が帰ったのだから、あとは我々で思う存分楽しくやろう(=8))」には〔価値顕現義務の原理〕が働いていると述べている。

蓮沼 (1987) で提示された「せっかく」の前提のうち、「価値顕現義務の原理」は、渡辺 (1980) では述べていなかった「Bの成立に対する期待」が持たされる理由、そして、前件と後件の関係による「せっかく」の叙法上の制限を上手く説明していると考えられる。

## 4. 「せっかく」の用法と前提

### 4. 1 「せっかく」の2つの用法

本稿では、2節で規定した、複文における「せっかく」の2つの類型（一）（二）をそれぞれ逆接用法、順接用法と呼ぶこととする。

（三）逆接用法：せっかく A のに ～Bだ（だろう）（＝(7)）

（四）順接用法：せっかく A（のだ）から Bしよう （＝(8)）

逆接用法と順接用法は、蓮沼（1987）の用語である。また、蓮沼（1987）は逆接用法、順接用法、圧縮用法<sup>6</sup>の3つの用法を設定している。以下では、蓮沼（1987）の圧縮用法を本稿に即して再構成して次のように示す。

#### ① せっかく連体句（A）＋N＋助詞B（または、～B）

- (12) せっかく咲いた桜の花が一晩で散ってしまった。（＝せっかく桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。）
- (13) せっかく恵まれたチャンスを利用しよう。（＝せっかくチャンスに恵まれたのだから、利用しよう。）

#### ② せっかくのN＋助詞B（または、～B）

- (14) せっかくの桜の花が一晩で散ってしまった。（＝せっかく桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。）
- (15) せっかくのチャンスを利用しよう。（＝せっかくチャンスに恵まれたのだから、利用しよう。）

#### ③ せっかくだが ～B

- (16) せっかくですがご要望に添いかねません。  
（＝せっかくお越し頂きましたが、ご要望に添いかねません。）

---

6 渡辺（1980）の「圧縮表現」に由来する用語。

④せっかくだから B

(17) せっかくだから頂いて帰しましょう。

(=せっかくご用意くださったのだから、頂いて帰しましょう。)

これらの文型はすべて、括弧内のように「せっかく A のに～Bだ」と「せっかく A (のだ) から B しよう」に言い換えることができる。従って、本稿では、(12)(14)(16)を逆接用法、(13)(15)(17)を順接用法としてまとめて扱うことにする。

#### 4. 2 「せっかく」に関係する2つの前提

本節では、「せっかく」に関係する前提について考察を行うことにするが、「せっかく」の〔順接用法〕と〔逆接用法〕における叙法上の制限を説明するためには、次のように、「せっかく」には、「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」という2つの前提が想定されていると考えるべきであろう。

##### 4. 2. 1 価値顕現の前提

1節で「せっかく」は、単文では用いられず(例1)、価値があると評価するある事態Aを前件、その価値の実現に関わる事態B(または、～B)を後件とする複文の従属節に用いられるという構文制限について述べた。これは、連沼(1987)の説明のように「せっかく」に「潜在価値は顕現させなければならない」という「価値顕現義務の原理」が働いているためであると考えられよう。

従って、本稿では、「せっかく」とはある事態Aを価値があると評価するが、その評価には(「価値顕現義務の原理」により)価値は有効に活用されるべきだという期待が前提として想定されていると考える。そして、本稿ではこれを「価値顕現の前提」と呼ぶことにする。

#### 4. 2. 2 価値消滅の前提

3.1節で述べたように、渡辺（2001）では、前件<sup>7</sup>の価値を有効に活用した事態Bが実現されてしまえば、「せっかく」は用いられないと指摘している。（例（9）～（11））

「せっかく」には、前件の価値を有効に活用すべきだという「価値顕現の前提」が想定されているという4.2.1節の説明からは、前件の価値を有効活用した事態Bが実現されたことを表す前掲した例（9）～（11）のような例文もありうるが、渡辺（2001）の指摘によると非文である。

ここから、「せっかく」には、「価値顕現の前提」に加えて、価値が有効に活用された事態Bは、ついに実現しない（～B）という予想が想定されていると考えられる。これを「価値消滅の前提」と呼ぶことにする。

以上から、「せっかく」はある事態を価値があるものと評価するが、その評価には「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」という2つの前提が想定されているといえる。そして、「せっかく」の「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」は、各用法における接続助詞と主節のモダリティ形式との共起制限として現れると考えられる。つまり、各用法には、「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」の両方が明示的、または、暗示的に想定されていると考えられる。以上をまとめると、（三）（四）はそれぞれ（五）（六）と表せる。

- （五）逆接用法：せっかくA（だからBしよう）のに～Bだ（＝（18））  
価値顕現の前提（暗示） 価値消滅の前提（明示）
- （六）順接用法：せっかくA（のに～Bのだ）からBしよう（＝（19））  
価値消滅の前提（暗示） 価値顕現の前提（明示）

---

（18） せっかく桜の花が咲いた（のだから花見に行きたい）のに、一晩で散っ

7 本稿でいう事態Aに該当する。



てしまった。

- (19) せっかく彼が帰った(のに、雰囲気<sup>6</sup>が盛り上がらない。でも楽しくやりたい)のだから、あとは我々で思う存分楽しくやろう。

## 5. 「せっかく」と「모처럼, 일껏」

### 5. 1 「모처럼, 일껏」の意味について

「せっかく」の各用法に対応すると考えられる韓国語の副詞としては「모처럼, 일껏」が挙げられる。これらの副詞の意味については、辞書の記述を中心に検討する<sup>8</sup>。

#### 【모처럼】

##### (Ⅰ)『표준국어대사전 (標準国語大辞典)』

모처럼 **부** ①벼르고 별려서 처음으로. ♯모처럼 마음먹은 일이 잘돼야 할 텐데. /나는 그녀에게 모처럼 용기를 내어 말을 걸었다. ②일껏 오래간만에. ♯모처럼 한가한 시간을 갖다./우리 가족은 모처럼 교외로 나갔다. (p.2181)

訳) **副** ①やっと、ようやく初めて。♀やっと決心したことがうまくいきますように。／私は彼女にやっと勇気を出して話しかけた。②せっかく、久しぶりに♀久しぶりにのんびりとした時間を過ごした。／うちの家族は久しぶりに郊外に出た。

##### (Ⅱ)『대국어사전 (大國語辭典)』

모처럼 **부** ①벼르고 별려서 처음으로. For the first time ♯~장만한 집.  
②일껏 오래간만에. After a long time (p.703)

8 「모처럼, 일껏」は、韓国語の副詞に関する代表的な研究 ((구연미 (1993), 박선자 (1983), 손남익 (1995), 이환복 (1976), 임유중 (1997), 장영희 (1995), 정교환 (1987), 최현배 (1937), 황병순 (1984) 등 (가나다順)) で言及されておらず、符見の限りではこれらの副詞の意味に関する記述がない。そのため、本稿では「모처럼, 일껏」の意味について辞書の記述を中心に紹介する。



伴われていることを表すものと言える。

## 5. 2 「せっかく」と「모처럼」

「모처럼」は、次のように「せっかく」の順接用法と逆接用法の両方に対応するものと言える。

(20) せっかく桜の花が咲いたんだから、花見に行こう。

모처럼 벚꽃이 피었으니까, 꽃놀이라도 가자.

(21) せっかく桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。

모처럼 벚꽃이 피었는데, 하룻밤만에 저버렸다.

しかし、「모처럼」は、「せっかく」とは異なって単文にも用いられることができる(例22)。ここから、「모처럼」には、「せっかく」のように価値は有効に活用されるべきだという「価値顕現の前提」が想定されているとは考えられない。

(22) 모처럼 벚꽃이 피었다.

久々に (\*せっかく) 桜の花が咲いた。

また、次のように、「모처럼」は主節に価値が実現された事柄が来ても用いられることができる。ここから、「모처럼」には価値はついに実現されないという「価値消滅の前提」が想定されていると考えられない。

(23) 모처럼 벚꽃이 피었기에, 꽃놀이를 갔다.

久々に (\*せっかく) 桜の花が咲いたので、花見に行った。

「せっかく」と「모처럼」は、共通して、当該事態が話者にとって価値があ

ることを表していると言える。しかし、「モチりん」には、「価値顕現の前提」や「価値消滅の前提」は想定されていないと考えられる。従って、「せっかく」に見られるような構文的な制限は持っていない<sup>9</sup>。「モチりん」は、元々、当該事態を価値があると評価するものではなく、当該事態がまれな出来事であるという意味から、その出来事はいつものことではない、つまり、話者にとって特別で価値があるという意味を派生したと解釈できる。

「モチりん」には、次のような「せっかく」の用例には用いられないという制限があるが、これは、先に述べたように「モチりん」が「久々に、まれに」という頻度の意味を持っているためであると考えられる<sup>10</sup>。

(24) 同・大浴場

保がバシャバシャと泳いでいる。

ノンビリつかっている悠作、顔をしかめて――

悠 作「泳ぐなよ、オヤジィ」

保「泳げよ、悠作ウ。せっかくこんなに広いんだぞ」(パパ)

헤엄쳐봐, 유사쿠.\*モチりん 이렇게 넓은데.

(25) 英 子「内容に関わらず、ジャケットは天の写真」

天「!?」

後 藤「最初はピンと来なかったんですが、いいアイデアですね (と、天を見る)」

英 子「でしょ?」

天「――。ちょっと、待って下さいよ」

英 子「せっかくルックスいいんだから、利用しなくちゃ」(WITH)

\*モチりん 용모가 준수하니까, 이용해야지.

9 必ず、複文の従属節に用いられ、主節には価値実現に関する事態がくるという制限。

10 日本語の例文の一部分だけを翻訳した場合、翻訳した部分を波線で明示することにする。以下、同様。

矢澤 (2000) は、「頻度の修飾成分は、ある事態が時間軸上においてどのくらい存在するかという、事態を存在のあり方を表す。ここでいう事態とは、ある場面において知覚された状況 (situation) である。いくつかの関連した出来事によって構成されることもあるし、コトやモノの存在や一時的にその対象に付与される状態もまた事態である (p.230)」と述べ、頻度の修飾成分は、動きだけでなく、コトの存在も修飾できるとしている。

㉔ あのお店には たまに／時々 特売品がある。

㉕ 彼は いつも／時々 機嫌が悪い。

但し、頻度の修飾成分は、「「特売品がある」「機嫌が悪い」のように変化する場合 (「特売品がない」とか「機嫌がよい」といった場合も想定できる場合) は、修飾対象とすることができるが、「非常口がある」とか「背が高い」の様に、恒常的な状態の場合 (つまり、「非常口がない」「背が低い」という場合が想定しにくい場合) には、不自然になる (p.231)」と述べ、頻度の修飾成分は、特定の個体において、その事態が見られる場合の多寡を表すのであると説明している。

㉖ ? あのお店には たまに 非常口がある。

㉗ ? 彼は 時々 背が高い。

つまり、「모처럼」が例㉔㉕のように変化のない恒常的な状態には用いられないことは、矢澤 (2000) の説明のように、事態が見られる場合の多寡を表すものであるためと考えられる。そして、次の例㉘㉙のように変化する状態の場合 (「家にいない」とか「テレビがある」という場合が想定できる場合) には「모처럼」が用いられるのである。

- (30) テレビを見ながらブツブツ言っている。

□ 同・竜太郎の部屋

ベッドに転がった竜太郎、退屈そうに酒を飲んでいる。

愛たちが覗き込む。

鈴木愛「お父さん、お酒はやめた方がいいんじゃないですか？」

大塚愛「ねえ、せっかく家にいるんだから遊ぼう

오즈카아이「모처럼 집에 있는 거니까 같이 놀아요.」

竜太郎「(不機嫌に) 居たくて家にいるわけじゃない」(パパ)

- (31) 食べ終わった新太郎、手持ちぶさたにお茶を飲んでいる。

竜太郎「ごちそうさま」

食器を片付け、自分の部屋へ行きかける。

新太郎「竜太郎(と呼び止める)」

竜太郎「なに？」

新太郎「ま、せっかくテレビがないんや。少しゆっくり話でもしようや。

親子の対話や」

신타로「모처럼 텔레비전도 없는데, 얘기라도 할까? 부모자식 간의 대화말이야.」

竜太郎「別にいいけど……」(うち)

### 5. 3 「せっかく」と「일껏」

「일껏」は、「せっかく」と同じく、単文には用いられず、必ず、複文の従属節に用いられるという制限がある(例32)。そして、「일껏」の用いられる複文の主節には、いつも当該事態の価値が活用されずに終わってしまった表現がくることから、「せっかく」の逆接用法に対応するものと言える(例33)。しかしながら、「모처럼」と異なって当該事態の出来事に、話者(または、文の主体)が関与していない場合には用いられない(例34)。

(32) \*せっかくパリまで来た。

(\*일껏 / 모처럼) 파리까지 왔다.

(33) せっかくパリまで来たのに、ルーヴル博物館は休みだった。

(일껏 / 모처럼) 파리까지 왔는데 르브르박물관은 휴관이었다.

(34) せっかく桜の花が咲いたのに、一晩で散ってしまった。

(\*일껏 / 모처럼) 벚꽃이 피었는데, 하룻밤만에 저버렸다.

そして、「せっかく」と同じく、主節に当該事態の価値が有効に活用された事態がくると非文になることから、「일껏」には「価値消滅の前提」が想定されていると考えられる。

(35) \*せっかくパリまで来たんだから、ルーヴル博物館を訪ねた。

(\*일껏 / 모처럼) 파리까지 왔기에 르브르박물관을 방문했다.

しかしながら、次のように、主節に当該事態の価値を有効に活用しようという表現がくると非文になる。ここから、「일껏」には「価値顕現の前提」は想定されていないと考えられる。

(36) せっかくパリまで来たんだから、ルーヴル博物館は見て帰ろう。

(\*일껏 / 모처럼) 파리까지 왔으니까 르브르박물관을 보고 가자.

「일껏」は、当該事態が状態性である場合には用いられない(例37)。さらに、「～てもらう、～てくれる」のような授受表現(例38/39)、そして、受け身表現(例40)など、当該事態で行われた動作に話者(または、文の主体)が関与していない場合には用いられないという制限がある。

(37) でも日曜日だったので、ヨーロッパ系のブランドショップが全部おやす

みでした。せっかく SALE と書いてあったのに、ブルノーマリで靴が  
買えなかったのが残念。次回は日曜日を避けてでかけます (笑)。(自分  
990730)

(\*일껏 / 모처럼) 세일이라고 써 있는데도, 부르노마리에서 구두를 못 산  
것이 안타깝다.

- (38) 美代子「(明るく) ゴメン。せっかく東京に飛んできてくれたのに、電  
話出なかったり、会わなかったり……」(逢い)

미치요 「미안. (\*일껏 / 모처럼) 동경에 와주었는데도, 전화도  
받지 않고, 만나지도 않고 해서……

- (39) みどり「どうしてあたしたち、こんなダサイ水着着なくちゃいけないん  
ですか」

中野先生「学校のプールだからよ」

みどり「せっかく可愛い水着買ってもらったのに……」

(\*일껏 / 모처럼) 예쁜 수영복을 얻어 입었는데……

真知子「そうよ、先生はカッコよく決めてるのにね」(うち)

- (40) 戦前、治安維持法違反で投獄された女優の故沢村貞子さんが随筆「わた  
しの昭和」でこう書いている。「戦後、やっと手にした平和を二度と失  
うまい…誰(だれ)しもそう思いながら、せっかく与えられた民主主義  
を育てきれずに右往左往している」(天声000308)

「전후, 겨우 손에 쥔 평화를 두 번 다시 잃어버리지 않기를… . 모두가  
그렇게 생각은 하면서도 (\*일껏 / 모처럼) 주어진 민주주의를 키우지  
못하고 우왕좌왕 하고있다.」

ここから、「일껏」は、話者(または、文の主体)の苦勞・努力を価値があ  
ると評価するものであるが、その評価には、苦勞や努力は報われないという予  
想(「せっかく」の「価値消滅の前提」に相当するもの)が想定されていると  
考えられる。



## 6. まとめ

以上、「せっかく」にみられる共起制限について「前提」との関わりを中心に考察した。そして、「せっかく」の各用法に対応する韓国語の副詞「모처럼, 일껏」を取り上げ、対照を行った。本考察の内容は、次のように要約できる。

「せっかく」は、当該事態を価値があると評価するものであるが、接続助詞と主節のモダリティ形式との間には一定の共起制限を持っている。このような共起制限により、「せっかく」の用法は順接用法と逆接用法とに二分することができる。また、「せっかく」に2つの用法に見られる共起制限を説明するためには「せっかく」の持つ価値評価には「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」という2つの前提が想定されていると考えられる。

「모처럼」は「せっかく」の順接用法と逆接用法の両方に対応するものである。しかし、「모처럼」は、「せっかく」に想定されている2つの前提、すなわち、「価値顕現の前提」と「価値消滅の前提」とは関わりを持っていないため、単文にも用いられるし、接続助詞と主節のモダリティ形式における共起制限も見られない。「모처럼」は、当該事態がまれな出来事であるという意味が、文脈によって、価値があるという意味として解釈できることから「せっかく」に対応できるものと考えられる。そして、「모처럼」は、「まれ」という頻度の意味から、恒常的状态を表す事柄には用いられないという制限を持っている。

「일껏」は、当該事態の行為に伴った話者自身<sup>\*</sup>(または、文の主体)の苦労や努力について価値があると評価するものであるが、その苦労や努力はついに報われないことを表すことから「価値消滅の前提」が想定されていると考えられる。ここから、「せっかく」の逆接用法に対応する。また、「일껏」には、状態を表す事柄や授受表現などのように、当該事態で行われた動作に話者(または、文の主体)が関与していない場合には用いられないという制限がある。

以上の内容を表でまとめると次のようになる。

「せっかく」の持つ前提と共起制限の関わりについて

	共起制限			前提		当該事態				(例)
	單 文	複 文	接続助詞と文末 のモダリティ形 式との共起制限	価値 顕現	価値 消滅	行為性		出来事へ の関与		
						有	無	有	無	
「せっかく」の順接用法	×	○	○	○	×	○	○	○	○	(18)
「せっかく」の逆接用法	×	○	○	×	○	○	○	○	○	(19)
모처럼	○	○	×	×	×	○	○*	○	○	(22/23)
일것	×	○	○	×	○	○	×	○	×	(33)

\*恒常的状态の場合には用いられない。

## 用例出典

- (パパ) - 「パパはニュースキャスター」ドラマシナリオ  
 (うち) - 「うちの子にかぎって」ドラマシナリオ  
 (WITH) - 「WITH LOVE」「土曜ドラマ館」  
 (逢い) - 「逢いたい時にあなたはこない」「土曜ドラマ館」  
 (自分990730) - 朝日新聞 自分にごほうび隊 (趣味) 1999. 07. 30  
 (天声000308) - 朝日新聞 天声人語 2000. 03. 08

## 参考文献

### I. 著書・論文

- 板坂 元 (1971) 『日本人の論理構造』講談社新書  
 西原鈴子 (1987) 「話し手の価値判断—その含意性と異言語への伝達の問題—」『言語報告集 8』国立国語研究所秀英出版 pp. 125-157  
 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版  
 進原昭子 (1987) 「副詞の語法と社会通念—「せっかく」と「さすがに」を例として—」『言語学の視界』大学書林 pp. 203-222  
 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書店  
 矢澤真人 (2000) 「4. 副詞的修飾の諸相」『日本語の文法 1 文の骨格』仁田義雄 他著 岩波書店 pp. 190-233

- 渡辺 実(1980)「見越しの評価「せっかく」をめぐる」『月刊言語』9-2 大修館書店 pp.32-40  
 \_\_\_\_\_(1996)『日本語概説』岩波書店  
 \_\_\_\_\_(2001)『さすが!日本語』筑摩書房

- 구연미(1993)『우리말 임의 성분 연구』, 부산대학교 박사 학위 논문  
 박선자(1983)『한국어 어저말 연구』, 부산대학교 박사 학위 논문  
 손남익(1995)『국어부사연구』, 박이정  
 이환목(1976)『수식의 논리(1)』, 『어학교육9』, 전남대학교 어학 연구소, pp.89-97  
 임유종(1997)『국어 부사의 범주 정립과 호응 및 어순에 관한 연구』, 한양대학교 박사 학위 논문  
 장영희(1995)『현대국어 화식 부사의 의미연구』, 숙명여자대학교 박사 학위 논문  
 정교환(1987)『국어 문장부사연구』, 동아대학교 박사 학위 논문  
 최현배(1937)『우리말본』, 정음사  
 황병순(1984)『국어부사에 대하여』, 『배달말(9)』, pp.73-99

## II. 辭書類

- 『대국어사전(大國語辭典)』양주동·이승녕 현문사 1981  
 『표준국어대사전(標準國語大辭典)』국립국어연구원 1999